

日本近代  
文学における  
批判派と  
叛逆派

1、序

志賀直哉は、戦後のある座談会の席上、太宰治の「斜陽」での敬語の用法を採りあげて、「貴族の娘が山出しの女中のような言葉を使う」とけちをつけ、太宰治は太宰治で、死の年に当る昭和二十三年、「如是我聞」で、志賀直哉の短篇「うさぎ」での「お殺せなさいますの？」なるセリフを逆用して、彼を「家庭のエゴイズム」を神とする「成金」と罵りかえした。もともと太宰文学は、志賀文学、並びに彼を「小説の神様」と祭り上げて来た「おけら」文壇（如是我聞での太宰治の言葉）に対するアンチ・テーゼとして育ってきたものである。従って右の買言葉は、決して只の言葉のはづみといったものではない。例えば昭和十九年の「津軽」には、已に志賀直哉を「貴族の下男」と評した言葉がみられる。だから「如是我聞」での彼の物言いは、感性的認識を超えないにしても、結局の処、文学の原則に、いや生活そのものの原則にかかわる発言だったといえよう。「同志」坂口安吾も流石にその物言いに關しては、「フツカヨイ的」と評さざるをえなかったが、当の志賀直哉の方

批判派と  
叛逆派

近  
松  
良  
之

では、小僧相手の喧嘩では「神様」の沽券にかかわるとばかりに、黙殺という手に出た。

坂口安吾には「教祖の文学」というエッセイがある。其処では、特に「無常といふこと」以後の小林秀雄が、骨董鑑定人ときめつけられている。もともと小林秀雄は、白樺派の要素を多分に身につけた芸術派<sup>註1</sup>として、似而非表現主義の立場に立つ評論家である。彼のその似而非たるゆえんは、彼がその評論活動のそもその初めから、ブルジョア・パイデア<sup>註2</sup>と表現主義<sup>註3</sup>とを混同するという誤りを犯している処にみる事が出来る。その二つの文学的立場は同じ個人主義という共通の装いを備えているながら、ブルジョア・パイデアは資本主義の現実と肯定的に密着したものであり、表現主義には明らかに反資本主義という意味での反現実主義という性格が宿っている。ところが小林秀雄はその両者を、天才的個性・才能という白樺派的乃至芸術派的な言葉のもとに混同してしまっている。従って例えば彼が好んでとりあげるボードレールとランボーとの本質的な差異に關しても、彼はそれを見失ってしまった。ボードレールとランボーとの本質的な相異は、資本主義的な意味での「現実」に對

する夫々の原則的な態度の相異に由来するものである。即ち、その相異は、ボードレールが資本主義的現実を原則的には肯定した上で、ダンディズム・頽唐主義・悪魔主義を唱え、ランボーがその現実に対する原理的な敵対と反逆とを自らの詩精神としている処にある。処が小林秀雄はその両者を、文学上の非凡な天才の才能ゆえの悲劇の実例と見做すに留まっている。ブルジョア・パイディアの系列に属した白樺派乃至芸術派と反ブルジョア主義の表現主義とを「天才的個性」という概念のもとに混同する似而非表現主義者たるゆえんである。尤も彼の文学的な名声は、その似而非表現主義のもつ曖昧性・二義性に由来するものでもあった。即ち、彼の評論の内容に備わる独我論的ミステイクの性格と表現形式に宿る教祖的托宣の性格は、右の二義性に由来し、同時にその事が、彼の評論に文学的創作的価値を賦与する事になったのである。その後彼の苦慮する処は、その似而非表現主義の袋小路からの脱出という事であった。一般的にいつて表現主義の袋小路からの脱出路の一つは、広義の存在論にあるといえる。従って第二次大戦を挟んだ「無常といふこと」以後の彼の評論乃至文学活動の移り行きは、一見して極めて当然の道筋とみえる。しかし、その出发点でブルジョア・パイディアと表現主義とをとり違えていた彼は、其処でも亦、原則的な誤りを犯してしまっている。即ち、存在論と骨董趣味との取り違えということである。彼の「モーツァルト」論は、骨董の目ききが、古陶器の肌理に舌なめづりをしながら、熱っぽい調子で陶器の美について語るに似た趣を備えている。彼のブルジョア・パイディアに関する非凡な才能は、そのすりかえを兎も角もボロを出さずにやってのけた処にある。

太宰治と坂口安吾とは、「新戯作派」<sup>註4</sup>の代表者と目されている。一方志賀直哉と小林秀雄とをつなぐものは、両者に共通する「白樺派」的要因である。中村光夫氏は小林秀雄に関する一文の中で、次のように言っている。「ここで氏と志賀直哉との関係を考えてみる必要があります。志賀直哉は青年期の氏が尊敬したおそらく唯一の同時代の作家であり、『志賀直哉論』はこの青春の美しい記念碑です。大岡昇平は青年期の氏から『白樺派』という印象を得たようですが、直哉と氏とのあいだにはいろいろな共通点があるようです」<sup>註5</sup>

坂口安吾はしばらくおくとして、太宰治は「破滅型」に属した私小説作家とみなされるのが、通説となっている。彼には葛西善藏について親近感をもって語った文章もある。「破滅型」の私小説と名付けたのは、伊藤整氏であったが、中村光夫氏も亦彼を「季節外れの私小説作家」とみなしている。若しも太宰治がその種の通念とおりの私小説作家であるとするならば、彼の志賀直哉に対する反撥は、そして同時に坂口安吾の小林秀雄に対するそれは、結局の処、自然主義（私小説）と白樺派とのあの古い対立関係の一変種として生れたものに過ぎないといえよう。若しもそうでないとするならば、恐らくは自然主義対白樺派というその古い対立関係そのものの再吟味から始めなければならぬであろう。

註1 小林秀雄の文学史上の位置は、明治三十四—三十七年を中心にして生れ、青年期に大正デモクラシーを迎え、昭和の初期から十年台にかけて活動期に入った「芸術派」（特殊日本の芸術至上主義という言葉で、後章においてやや詳しく扱われている。その項参照）にある。白樺派的性格は、彼の属性を示すに留まるものである。ただ、現在の処では、要するに彼がブルジョア・パイディア（註2）の代表者の一人であるということ、はなしを進めてよ

いと思われるから、仮りにその白樺派的側面についてのみ注目するのである。  
註2 パイディアはヒューマニズムの語源として、人間の形成乃至教養を意味する。ヒューマニズムの語は、元来ヘレニズム時代のギリシャの教養の取得を意味していた。ブルジョア・ヒューマニズムは、資本主義時代における個々のヒューマニズムを意味している。即ち、それは資本主義のもとにおける個人主義的パイディアを意味する。其処では文学は個の表現に終始し、かつその個は、「近代的我自我」の主張、完成を目指すものとして、資本主義的現実を大前提として肯定する立場に立つ個を意味する。従って、そのような個的表現を基盤とする文学は、結局の処、ブルジョア・パイディアに属しているのである。なおそのような個の資本主義的性格については、以下本文で「貨幣の物神性」との聯りで説かれる。結論的に言うならば、その個は、貨幣を新しい神とする、窓のないアトムとしての個を意味し、そのパイディアは、貨幣と儲けと結付くものである。従って、ブルジョア・パイディアとは、アトムの個における「儲け+教養」において成り立ち、それが、ブルジョア・ヒューマニズム、ブルジョア個人主義を中核とする一切のブルジョア・イデオロギーの特徴である。なお「儲け+教養」の場合のプラスの符号の意味については本文にゆずることにする。

註3 資本主義のもとにおける個人主義的な反資本主義（但しそれは、無規定的な反現実主義、反逆主義という形をとって現われることが殆どであるが）を広義の表現主義的態度と呼ぶことにする。それは、個人主義的な反個人主義（ブルジョア個人主義）という二義的な性格を帯びた態度である。但し、詳しくは本文にゆずるが、芸術至上主義のもつ反市民的・反現実的態度は、表現主義には属さず、結局の処はブルジョア・パイディアに属している。何故なら、芸術至上主義の反現実主義は、なる程反市民的ではあるが、しかし大前提として、資本主義的現実を肯定的に不問に附しているからである。即ち、それは不問に附された資本主義的現実の領域の中で、選ばれた反市民的芸術家意識を主張するものだからである。

註4 戦後の文学の一流派として、時として伊藤整・石川淳・織田作之助・田中

以下説かれるように反逆的文学の实例として太宰治と坂口安吾の二人を特にとりあげるものであるから、「新戯作派」についての考察は別の機会にゆずることにする。

註5 中村光夫氏が「白樺派どまり」の評論家であることが、その種の小林秀雄の基にあることも又注目すべきであろう。臼井吉見氏はある座談会で次のように発言している。「……中村光夫の関心は近代文学どまりで、現代文学には関心も理合もゆきとどかぬところがある」。

× × ×

自然主義文学の最盛期は、明治四十年〔1907〕からほぼ三年間で終っている。四十三年には早くも「白樺」が刊行され、以後大正にかけて、時として「白樺論争」と呼ばれる自然主義と白樺派との論争が繰りひろげられるのである。但し今此処では、その時其処で繰りひろげられた論争の内容をとりあげる必要はない。明治の終りから大正にかけての特定の時点を座標にとれば、その当時の様々に対立し合う論争（例えば自然主義対ヒューマニズム、現実主義対理想主義、没価値論対理想論）は、確かに右の両者の質的差異性を物語るものの如くである。しかし、現代〔昭和三十七年〔1962〕にこれは書かれている〕を座標にとって振りかえるならば、その両者は質的な差異性を失って、共に等しくブルジョア・パイディアに則る「近代派」という点で質的同一性を浮び上らせるのである。その差異性は、等質的近代派という共通の地盤の上での属性の差異に過ぎない。即ち、両者の位置する時代と階層から来る属性の差異性である。その差異性は決して両者の等質的本質を破るものではない。

第一期の自然主義作家達は、多くは明治初年の生れである。即ち、独歩・花袋・秋声が申し合わせたように明治四年辛未〔1871〕に生れ、

藤村が五年壬申、泡鳴が六年癸酉、秋江が九年丙子という具合である。当面の処、問題になるのは、以上の第一期の作家であるが、更につけ加えるならば、第二期に属した青果は明治十一年戊寅、白鳥は十二年乙卯に生れている（これこそ正しく季節外れの私小説作家といふべき善藏は二十年丁亥、磯多は三十年丁酉の生れである）。白樺派の作家は、ほぼ一まわりおくれて生れている。即ち、武郎が十一年戊寅、直哉が十六年癸酉、実篤が十八年乙酉である（武郎は寧ろ後述する批判者の列に入れるべきであろう。白樺派プロパーの中からは除外すべきである）。自然主義と白樺派との出現期は、先述のように殆ど同じ時期である。しかし、両派の作家の誕生の時期が明治の変動期において殆ど一まわりかけ離れている事には、注目すべきであろう。自然主義がブルジョア・パイディアの先駆的主張者であるのに対して、白樺派が少くとも一步を超えた場処にいる（白樺派がブルジョア・パイディアの具現者・休現者である事に対して、右の生誕の時期の問題は決して充分条件にはならないから、敢えて「一步を……」と言うのである）のは、右の事を必要条件としているのである。

自然主義作家の多くは、地方の中小地主の子弟で、或は笈を負い或いは家をとび出して上京し、本郷・早稲田界限で下宿暮しをしていた連中であり、白樺派は東京のブルジョア階級の子弟で、主に学習院に学んだ。田山花袋はいう。「この白樺派の連中は、今までの中流階級十士階級、準士族階級に対して起った貴族階級の合同乃至覚醒と言ったやうなものではなかったか。あまりに長く中流階級に文壇の枢軸を握られて来たので、そのために奮い立った一つの運動ではなかったか。」

右のような時代の階層的條件を備えていた自然主義では、特に封建的強圧に対する「近代的自我」の先駆的主張という事が、ライト・モチーフを形造る事になった。そして詳しくは後にふれる事であるが、封建的強圧のもとでのブルジョア個人主義の先駆的主張という事は、消極的な「自己告白」そして「現実暴露」という形をとって現われる他なかった。結局の処、絶対主義↓「偽のボナパルティズム」↓軍・封・帝国主義という「時代閉塞」的な状況のもとで彼等の主張するブルジョア個人主義は、或いは病的現象に陥り或いは敗北を喫し、その苦闘と病的現象と敗北の報告書が、やがて後には「破滅型」と名付けられるまでになった。「私小説」を生んだのである。ところが後者即ち白樺派では、先づ階層的には、いち早く封建色から抜け始めた都会的ブルジョア的環境の中で、彼等は個性の開花・発展・伸長を比較的のびのびとたいあげることが出来た。更に時代的には、彼等の活動期と日露戦争以後から大正にかけての「大正デモクラシー」と呼ばれる時期とが重なり合っている事にも、注目すべきであろう。即ちブルジョア個人主義にとって例外的に恵まれた、日露戦争以後から大正時代にかけての「大正デモクラシー」なる時代の空気が、白樺派に、より一層の脚光を浴びせかける事になったのである。従って自然主義対白樺派という主題をめぐってなされた当時の論争には、特に白樺派からする自然主義への二重の意味での優越感が隠見しているようである。大正七年に武者小路は「文章世界」に「懐疑の入れ方」と題して次のように言っている。「自分達は自然主義の考へ方を極端に一度受けた処から、反って人間には愛すべき点があるといふことが珍しくなったのだ。ありがたくなつたのだ。……だから、自分達

が出たら自然主義は過去のものになるのは当然である。しかし自分達の影響を悪く受けて、極端に人間を愛のかたまりのやうに見るものがあればそれはまちがひだ。……彼等は懐疑を入れることによって、人間が獸に近いことを発見してよろこぶが、自分達は懐疑を入れることによって、人間はやはり人間だといふことを段々発見してよろこぶのだ。……自分達はいくじをひいたのだ。このことは自然主義に感謝していい。よく破壊してくれました。建設の方は私達が引受けます。しかし、先述のように現代という時点から振りかえるならば、両者は属性こそ異なれ結局の処同質の「近代派」にすぎず、その相異はせいぜい、時代的なブルジョア個人主義の発展の度合い、或いは更に都会と田舎、都市ブルジョアと地方地主という現象面に由来するに留まるものといわねばならない。そして武者小路のいう「いいくじ」とは、恵まれた階層運並びに「大正デモクラシー」なる時代運という「当りくじ」を意味し、しかし、大きな歴史の流れからすれば、封建制に対し不可抗的な破壊の戦いを挑んでその結果自らの破壊という「悪いくじ」を引き当ててしまった自然主義文学・私小説の方が、寧ろ中村光夫氏の言う通りに「日本文学の主流」となったのである。それに反して、白樺派は、資本主義のプレステイジの幻影に酔いかけた一部の小市民的教養派にとってのアイドルに過ぎなかったといえる。そして、白樺派の親戚筋に当る大正教養派は、以後長く日本の「教養俗物」の温床となったのである。

註1 当時新進の哲学者であった安倍能成（明十六生）、阿部次郎、和辻哲郎の諸氏が、白樺派の弁護人として活躍したことを附記しておく。

註2 田山花袋著「近代の小説」。なお瀬沼茂樹氏は「白樺派の文学」で次のよ

#### 批判派と叛逆派

うに言っている。「白樺」は、第一に、乃木希典を院長とする学習院に学んだ青年たちの手になる同人雑誌であった。かれらは、みな公卿華族（実篤ら）か封建武士（直哉・武郎）から実業界・官界にうって出て成功した特権階級（この階級に因縁の深い十五銀行や日本鉄道に關係した）の子弟で、つまり二代目三代目で、『食うに困らぬ』人たちであった。この点、藤村・花袋のような没落した旧家・士族出身の田舎者で、自己ばかりではなく、一家の運命をも雙肩に担って、自ら開拓していかなければならなかった自然主義作家とは、大いに条件を異にしているといわなければならぬ。のみならず、実篤が明治天皇の内仕に、武郎が大正天皇の学友に推挙されたことがあるというような、特殊な身分關係が生きていた。ここにかれらの特権意識の基礎、天才主義、楽天主義、理想主義、人間主義の根底があるとともに、また「私達の階級の人が世界を恐れる」（実篤）妙なコムプレックスの生れる所以であったことも忘れることはできない。実篤や直哉が軍人院長乃木希典に激しい反感を示したばかりでなく、伊藤博文、大隈重信、桂太郎らを歯牙にもかけなかった根拠は、その反軍思想にもあるが、またこの特権意識にあつたといつてよい。（実篤「人類と日本人」一九一三、二、参照）後に実篤が「自分たちは食うに困らなかつたというのは、強味でもあり弱味でもあり、また強味でもあると思つている。経験の狭いのがその弱点だ。しかし純粹な気持で文学がやれたのは強味である」といつていることも、記憶にとめておく必要がある。」

× × ×

若しも太宰治が、中村光夫氏のように「季節外れの私小説作家」であり、又詳しくは後でふれるが奥野健男氏のように「封建的人間」であつたとするならば、彼の志賀直哉に対する反撥は、地方から都市への、そして地主階級から都市ブルジョア階級への、自然主義的私小説作家的なコムプレックスに根ざすものに過ぎないといえる。事実太宰治は、

青森の地主の出である。奥野氏は太宰治の実家の地方地主的な封建色を指摘するために、「人間失格」の一部を引いている。「自分の田舎の家では、十人くらゐの家族全部、めいめいのお膳を二列に向ひ合せに並べて、木の下の自分は、もちろん一ばん下の座でしたが、その食事の部屋は薄暗く、昼ごはんの時など、十幾人の家族が、ただ黙々としてめしを食ってゐる有様には、自分はいつも肌寒い思ひをしました。それに田舎の昔気質の家でしたので……」。これは何処まで太宰治の実家の空気を語るものであるか、やや疑わしいが、次に挙げる「思い出」の中の一節は、彼の実家の封建色をよりあからさまに示すものといえる。「小学校四、五年のころ、木の兄からデモクラシーといふ思想を聞き、母までデモクラシーのため税金がめつきり高くなつて作米の殆どみんなを税金にとられる、と客たちにこぼしてゐるのを耳にして、私はその思想に心弱くうろたへた。そして、夏は下男たちの庭の草刈に手つだひしたり、冬は屋根の雪おろしに手を貸したりなどしながら、下男たちにデモクラシーの思想を教へた。さうして、下男たちは私の手だすけを余りよるこぼなかつたのをやがて知つた」。彼の実家が地方地主に属していた点では、私小説作家の場合と変らなかつたといえる。しかし、それは決して只の中小地主階級ではない。彼の成長期に当る大正年間の彼の実家は、当時、多額納税の貴族院議員を父にもつ青森県下有数の大地主である。明治の後半に成長期をもつた白樺派が属していた、当時の都市ブルジョア階層と較べてさえ、いずれの側により濃厚な封建色が宿っていたかは、一概には決められない事である。彼の実家は、生活様式の点では充分にブルジョア化された封建大地主の家庭だつたといえる。彼の作品の至る

処から、その事は伺える事である。ちなみに太宰治の生年は、後述する芸術派の作家群よりもやや遅れた明治四十二年己酉〔坂口安吾は三十九年丙午〕であり、成長期に例の「大正デモクラシー」の時期を迎えている。従つて、彼を封建の中での反封建主義者にしたてあげるために、彼の実家並びに成長期の状況から封建色のみを摘出しようとする事は、いささか一面的に過ぎるといえよう。坂口安吾は「不良少年とキリスト」と題する文章の中で、次のように言う。「彼(太宰治)の小説には、初期のものから始めて、自分が良家の出であることが、書かれすぎている。そのくせ、彼は、亀井勝一郎が何かの中で自ら名門の子弟を名乗つたら、ゲツ、名門、笑わせるな、名門なんて、イヤな言葉、そう云つたが、なぜ、名門がおかしいのか、つまり太宰が、それにコダワツテいるのだ。名門のおかしさが、すぐ響くのだ。志賀直哉のお殺しも、それが彼にひびく意味があつたのだろう」。ところが、その坂口安吾自身の出身たるや、これ亦、太宰治に劣らぬ「名門」なのである。年譜によると、彼の実家は、太宰治の場合同様、新潟県下有数の大地主であり、「徳川時代には広大な田地の他、銀山、銅山をも所有し、阿賀川の水は濁れても、坂口家の金はかれぬといわれた」とある。恐らくは此処にも、ブルジョア化された封建大地主という生活様式の例がみられる筈である。憲政公の総務をつとめた坂口安吾に対して、徹底的な放任主義をとっていた事に限りをつくした坂口安吾に対して、徹底的な放任主義をとっていた事にも、彼の実家の空気的一端はうかがえるであろう。「新戯作派」を代表する反逆者作家が、申し合わせたように、明治末年のブルジョア化された地方大地主の、十番目の六男〔太宰治、但し実際上は四男〕並びに十

二番目の五男〔坂口安吾〕として生れ、大正デモクラシーの時期に成長期を迎えている事は、極めて興味深い事といわねばならない。明治初期の地方中小地主から自然主義作家が生れ、明治中期の都会的ブルジョアジーから白樺派が生れ、明治末年の地方大地主からは、反ブルジョア主義の反逆派的戯作派が生れたのである。同じく明治末年の都会的中間階級から生れたのは、恐らくは太宰治、坂口安吾と同年輩乃至同時代の「芸術派」並びに「プロレタリア作家」だったといえよう。<sup>註1</sup> 結論を予め先取して言うならば、太宰治並びに坂口安吾は共に反ブルジョア主義の作家であり、反ブルジョアという意味においてのみ封建びいきであったといえるのであるが、彼等の出身が其処にどのような必然性をもって働きかけていたかという事に就いては、此処では省略しておかねばならない。

奥野氏は太宰治の実家の封建色を指摘したうえで、彼の文学の本質を規定する結論として、次のように言っている。「つまり太宰治は、本質的に近代人ではなくて、封建的人間だったので。典型的な日本人だったので。ぼくはなにも彼が天皇をもち出したからそうだと言っているのではなく、太宰自身いつているように『一宿一飯の恩義などという固苦しい道徳に悪くこだはる』（東京八景）古風な倫理や感性を身につけて世に出たことです。もちろんそれだからこそ彼はその封建制に反逆したのです。だがいかなる反逆も下降もある秩序に向ってなされる以上、その意味においてその秩序の中にあるといえます。つまり反逆や下降の仕方もその秩序の影響をまぬがれないのです。太宰の反逆したのは近代資本主義的秩序に対してというより、自己の育ってきた日本の封建的秩

序に対してだったのです。<sup>註2</sup> これは、太宰治に対してというより、自然主義作家乃至それ以前のロマン主義作家に対して当てはまる意見である。奥野氏も亦結局の処は、中村光夫氏並びにその他の評論家と同様に太宰治を自然主義乃至私小説作家とみなしているのだろうか。

封建的秩序の中で封建に反逆したのは、日本ではもともとロマン主義から成育して来た自然主義の作家達であった。もっとも異論がないわけではない。小林秀雄は「私小説」を現定して次のように言う。「わが国の自然主義小説はブルジョア文学といふより封建主義的文学であり、西洋の自然主義文学の一流品がその限界に時代性をもってゐるに反して、わが国の私小説の傑作は個人の明瞭な顔立ちを示してゐる」。この文中の封建主義的文学とは、いかなる意味のものであるのか。又、個人の顔立ちとは、何を意味するものであるのか。此処にも氏の似而非表現主義的ミスティックが顔を出しているようであるが、もともと「封建主義的」とは、ある時は封建の中であるいは資本主義の内部で又ある時は封建以前の時代の中で、封建的なものを讚美し主張し弁護するイデオロギーを指している言葉であろう。しかも氏は別の文章「菊池寛論」では、自然主義文学について、右の発言と自己撞着を犯す如きことを言っている。「描写の後に寝そべてスタイルを練磨した事にかけてはわが国のブルジョア・リアリズムは世界無比だ。その結果第一流の小説が小説本来の性格を失って散文詩となる傾向においても世界に冠たる事を示した」。一体自然主義文学は、そしてその変種である私小説は、封建主義的文学であるのか、それともブルジョア・リアリズムに則ったブルジョア主義的文学であるのか。

奥野氏のいう「封建の中で封建に反逆した」文学は、決して封建主義の文学と呼ばれるべきではないであろう。それは、封建の中でブルジョア個人主義の旗印のもとに封建に反逆した文学として、ブルジョア主義文学と呼ばれるべきであろう。従って、小林秀雄のいう自然主義文学あるいはその変種である私小説は、決して封建主義的文学ではなく、右の如き意味でのブルジョア主義文学といわれるべきであろう。従って奥野氏が太宰文学の本質規定として指摘した「封建の中の反封建」という規定は、太宰治に対してではなく、吾国のロマン主義文学そして特に自然主義文学に対してこそ正しく当てはまるものである。日本の自然主義文学は、絶対主義↓偽のボナパルティズム↓軍・封・帝国主義という「時代閉塞」的な状況のもとで、ブルジョア個人主義に則る「近代的自我」を嚆として、自己告白と現実暴露とを武器として、封建に対して不可抗的な戦いを挑んだ文学であり、特に「私小説」と呼ばれるに至ったその変種は、絶望的だった戦いの戦傷と敗北の綿々たるルポルタージュを指すものである。そして、白樺派は恵まれた「くじ運」の中で開花したブルジョアの室的室吹きの花群であったというべきであろう。太宰治の文学は、決して封建主義的文学ではなく、又決してブルジョア主義の文学でもない。それは結論を先取するというなら、反ブルジョア主義の文学である。

註1 太宰・坂口の反逆派と並んで、芥川の死以後の日本の文学の流派を形造つたものに、「社会派」と「芸術派」とがある。社会派の中では、明治二十七年甲午生れの葉山嘉樹はやや例外であるが、中野重治は三十五年壬寅、小林多喜二、島木健作は共に三十六年癸卯に生れている。芸術派では、三十二年己亥生れの川端康成がやや例外的であるが、梶井基郎、富永太郎が共に三十

四年辛丑、堀辰雄が三十七年甲辰、中原中也が四十年丁未に生れている。更に同年輩の外国文学畑、評論畑では、小林秀雄が三十五年、竹山道雄、中島健蔵が三十六年、桑原武夫が三十七年に生れている。

註2 奥野氏の文中にみえる天皇陛下云々とは、「パンドラの匣」の中の次のような言葉である。「真の自由思想家なら、いまこそ何をおいても叫ばねばならぬ事がある。……天皇陛下万才！この叫びだ。……それはもはや神秘主義ではない。人間の本然の愛だ」。

× × ×

太宰治が季節外れの私小説作家であるという事にも、季節外れという修飾語については別問題として、一分の理がないではない。彼は常に自己を語り、殆どナルシシズムといえる程に己れ自身にとりつかれ、自伝性の濃いイツヒ・ロマンを採用する事が多かった。尤も彼には所謂「私小説作家」にはみられない「はじらい」（後出、反逆派Ⅱ註1参照）が備わっていたから、「創作において、彼は決して素顔を見せようとしていない。……こういう彼にとって、リアリズムほど味気ないものはない。……こういう自然であろう。……リアリズムのいわば純粹化の結晶が私小説であるというのが、私小説作家の信念であるにちがいない。だが私小説ほど嘘のかたまりはないというのがおそらく太宰の考えだったと思う」といっているのは、「太宰治論」での臼井吉見氏である。而も他方では、彼の書いた殆どの作品は、丁度メレジコフスキがトルストイについてそう言うのと等しい意味で結局の処、彼の自伝、日記に他ならなかったともいえるのである。そして「ゲートとトルストイ」のT・マンに倣うなら、同じくトルストイの場合と同様に彼の文学の中核は、「白



「己愛」にあるといえよう。但し附言するならば、「ゲーテとトルストイ」のT・マンでは見逃されている「疎外者」の自覚と結つく「自己愛」、即ち、自己愛の変種を意味する「郷愁愛」<sup>註1</sup>が、彼の文学の母胎の一つをなしているのである。とするならば、彼は一体私小説作家であるのかないのか、又あるとするならば、所謂私小説作家との違いがあるのかないのか。考えさせられる事である。

右の疑問は、「私小説」なるものの正体が、もともと不確かなままである事に由来している。不確かなままで「私小説」といわれているものには、原則的に「私小説一般」と「特殊日本の私小説」とがそれぞれの外延並びに内包の上からして区別されるべきである。例えば小林秀雄の今もなお著名な「私小説論」でも、又寺田透氏の「私小説並びに私小説論」でもその区別は見失われ、その事から私小説論の混乱が生じているといえるのである。

元来資本主義時代の文学は、詳しい説明は後段にゆづるとして、全体として内在的現世的（中世の超越的宗教的という特徴に対して）性格を担いつつ、先づ第一にはブルジョア個人主義に由来する個性主義の、個人的主観的表現性（表出性）を特徴とするものである。その個性主義の「私的性格」「私性」が、「私小説一般」の由来である。従って「私小説一般」は、近代文学の殆ど全ての外延と重なり合う概念である。それに対して、「特殊日本の私小説」とは、「私小説一般」を自らの一因子として含んだ「自然主義文学」の特種な一変種を意味する。

資本主義時代の文学の第二の特徴は、これも後段に説明をゆずるが「実証主義」にある。それは、自然科学の侵入という他の一切の文化領

域でみられる現象の一例と考えられる。従って資本主義時代において最も資本主義的な文学である「自然主義文学」に、右の「実証主義」の特徴が典型的に示されるのは、当然すぎる程当然な事といえる。しかし自然主義文学でさえ、それを成り立たせているのは実証主義の因子だけではない。其処にも先述の「個性主義」即ち「私小説一般」の因子が加わっている。従って、自然主義文学とは、「私小説一般」＋「実証主義」という形を備えた合成物と考えられる。石川啄木が自然主義を、「自己主張的傾向」（個性主義、私小説一般）と「自己否定的傾向」（実証主義に由来する反個性主義）という矛盾する因子の合成体とみているのは、その二つの因子並びにその関係に関して、正確な理解を欠いた文学史家の多し中で、珍しい程の卓見といわねばならない。ところで、「特殊日本の私小説」とは、右の如き自然主義文学の特種日本の一変種として生れたものである。従って外延上並びに内包上、「私小説一般」と「特殊日本の私小説」とは質的に相異なる概念として扱われなければならない。例えば以下に引用する二つの文章で、共に私小説を問題にしながら、バルザックに関して全く相反する意見が述べられているが、問題を紛糾させる原因は、「私小説一般」と「特殊日本の私小説」との区別を見逃したままで「私小説」の語を使用する処にあるといえる。先づ久米正雄のいう処を挙げると次の如くである。「芸術が真の意味で、別の人生の創造だとは、どうしても信じられない。そんな一時代前の、文学青年の誇張的至上感は、どうしても持てない。そして只私にとっては、芸術はたかが其の人の踏んで来た、一人生の『再現』としか考へられない。例へばバルザックのやうな男がゐて、どんなに浩瀚な『人間喜劇』を書き、

高利貸や貴婦人や其の他の人物を、生けるが如く創造しようと、私には何だか、結局、作りものとしか思はれない。そして、彼が自分の製作生活の苦しさを洩した、片言隻語ほどにも信用が置けない」（大正14年、文芸講座「私小説と心境小説」）。二つ目は、寺田透氏の言葉である。

「伊藤整もいふ如く、また小林秀雄もジャン・ジャックルソーが視野にあるうちは注目したごとく、近代小説は、バルザックの場合でさへ、自意識乃至自我の自己表白欲を核として存立したものである。（バルザックの小説がいかにかれの破産や恋愛体験と不可分の関係にある「告白」であるかは、ツヴァイクがそのバルザック論で興味深く語っている）。だからこそ、近代小説の説明に当っては、嫌な言葉だが、分身といふ言葉を用いて、作中のどれか一人の人物を他よりも濃厚に作者の間乃至思想を代表するものとして取り出すといふあのやり方が普通に採用されるのである」（『私小説並びに私小説論』）。バルザックに対する私小説をめぐっての意見の相異は、久米正雄が「特殊日本の私小説」の立場に立ち、寺田透が「私小説一般」の立場に立っている事から生じている。而もそれぞれの場合に、その二つの私小説の概念的区別は無視され、意味内容の違ったものが何のことわりもなく同一の「私小説」の語で指示されている。問題は解決されないばかりか、そのまま紛糾を続ける一方である。

「私小説一般」と「特殊日本の私小説」との区別並びにつながりは、自然主義文学を両者の間に介在させる事で明らかにする。即ち、「私小説一般」は近代文学の殆ど全ての外延と重なり合う概念であり、自然主義文学は「私小説一般」を自らの一因子として備えたものである。換言

すれば、自然主義文学は「私小説一般」に対して、外延においてより小、内包においてより大という種概念を意味する。そしてその自然主義文学に対して、更に一段の種概念の位置にあるのが、「特殊日本の私小説」である。これは、自然主義文学のうちでも特殊な性格を備えた「日本の自然主義」の文学の一変種として生れたものである。従って、中間の自然主義文学を抜いて考えるならば、「特殊日本の私小説」は、「私小説一般」の種概念の位置を占め、前者は後者に対して、外延において狭く、内包において広いものと考えられる。更に換言すれば、「特殊日本の私小説」にとって「私小説一般」は、単に自らの質料因を意味するに過ぎず、「特殊日本の私小説」は、その質料因に更に独自の形相因が加わって出来たものと考えられるのである。<sup>註2</sup>

此処で改めて太宰治に戻るならば、彼が私小説作家であるというのは、右の「私小説一般」の意味でなら、尤もな事といわねばならない。しかし多くの場合に彼を私小説作家とみなすのは、意識的無意識的に「特殊日本の私小説」を「私小説」の同義語とみなす立場からである。従ってその意味でなら、彼は決して私小説作家ではない、といわねばならない。

以上の事はなお説明不十分なままの結論として言及されるに留まるものである。以下理論的並びに歴史的に一方では私小説の系譜をたどり、かつ他方では太宰治並びに坂口安吾の文学の流れをたどる、というかなりの迂路を経て、初めて右に触れた事柄は、充分な意味をもつものとなるであろう。以下近代派という項目の下に自然主義以降の文学の流派をそして更に批判派という項目の下に反近代主義の流派を、みていく事に

する。太宰治・坂口安吾の文学は、後者の末流に位置している。

註1 「郷愁愛の文学」に関しては、小稿「ABC表による性格論と芸術論」参照。なお本論では、以下荷風・潤一郎の項、並びに終章太宰治の項参照。

註2 特殊日本の私小説の誕生に関して、論争相手である白樺派からの影響が指摘される事がある。即ち、白樺派での「自分は……」「自分が……」という当時として極めて大胆な表現法が、逆に自然主義作家に影響を与え、その影響が、私小説の誕生にあづかって力があつたというのである。しかしその影響は手法上の刺激に留まるものと考えるべきであろう。なぜなら、白樺派での「自分は……」における「私性」は「私小説一般」に近いものであるから、その「私性」から、特殊日本の私小説の「私性」への文学的態度に関する影響は考えられない事だからである。

白樺派に属した志賀直哉の作品における「私性」が、時として特殊日本の私小説の「私性」に通じるものとみられる理由については、本論の後段にゆずる。

## 2、近代派

× × ×

先きに「個性主義」と「実証主義」との合成物として自然主義文学を規定したが、その点では日本の場合でもヨーロッパの場合でも変る処はないといえる。ただ日本の自然主義とヨーロッパの、殊にゾラによって代表されるそれとの違いは、①二因子の優先関係、②二因子の結合の仕方、の相異にあるといえる。

① ゾライズムでは明らかに実証主義の因子が優先するのに対して、日本の自然主義では、個性主義の因子が先決問題になっている、という優先関係の相異が二つの自然主義の間にみられる。日本の場合その個性

主義は、先づ、絶対主義的現実のもとでの「近代的自我」（ブルジョア個人主義）の主張という形をとって現われた。それは例えば藤村の「新しい詩歌の時は来りぬ」という若菜集（明30）の序にみられるように、ロマン主義の形を執って現われた。そして実証主義は、ロマン的詩歌から散文的小説への個性主義自身の深まり乃至連続的变化として、あとから附け加わった。それが日本の自然主義文学誕生のアウト・ラインである（若菜集は明29年仙台で書かれ、30年帰京と同時に刊行された。破戒は37年頃から着手され、39年自費出版された。破戒は日本の自然主義文学の発端とみなされている）。ゾライズムを表立って採用しようとしたのは、「前期自然主義」と呼ばれる時期（明33—36・37）の天外・荷風であったが、実証主義の精神は、産業革命とブルジョア革命を不十分にしか経験していない当時の似而非近代国家の下では、個人的な又一時的な実験の域を超える事は出来ず、それも歪曲され稀薄化された形での事に留まってしまった。当時の日本は、やっとマニユファクチュアの段階を抜け出しかけたばかりであった。又なし崩しの上からのブルジョア革命が、絶対主義の本質を変化させないままになされかけていた。「外見的立憲主義」乃至「偽ボナパルティズム」と呼ばれる時代であり、以後偽ボナパルティズムが帝国主義化する事で、日本は絶対主義から軍事的封建的帝国主義の時代へと変わって行くのである。そのような時代的背景の中で、明治四十年以後の所謂「自然主義」は、前期の場合とは違って予め先づロマン主義の形を執っていた「個性主義」からの連続的成熟・発展・深化として生れたものである。なお明治四十年代から大正にかけて、護憲運動その他のデモクラシー運動にみられる所謂「大正デモクラ

「シ」の時期が、一挿話の如くに絶対主義から帝国主義にかけての背景にさし挟まれている事も、自然主義文学発生の基盤として注意すべきであらう。

日本の自然主義文学が、ロマン主義からの連続的発展として誕生した、という特殊事情には、絶対主義的な偽ボナパルティズムと称されている当時の時代的背景の、封建制的資本主義という二重性が、特に強く働きかけている。ヨーロッパ（特に英・仏）の自然主義が、ブルジョア革命と資本主義の成熟を背景にして、実証主義による、封建的残滓にまつわりつかれたロマン主義並びに初期近代的個性主義の否定という副期性を備えていたのに対して、絶対主義↓偽ボナパルティズムの内部で発生した日本の自然主義は、ロマン主義の否定乃至個性主義の否定という副期性をもつ事は当然出来なかった。それは結局ロマン主義からの連続的発展という形をとって、ゾラの場合とは違って「自然主義宣言」（一八七九年「共和国と文学」という副期性をもたずに誕生する他なかった。正宗白鳥は「自然主義文学盛衰史」の中で、自然主義誕生の頃を回顧して次のように言っている。「破戒の出た頃から、誰れ云ふとなく自然主義の名が文壇に現はれ出した。いつ誰が最初の発言者であったか、私も知らないのであるが、これは時代の声であったのだらう。天に日なし人をして云はしむるといってもいいであらう」。

なおロマン主義から自然主義への連続的成熟という事には、更に、絶対主義的な体制のもとでの御用資本主義の生産力の急速な発展並びに「外来思想の氾濫」という、個性主義にとってのいわば「外発的開化」ともいふべき事情が考えられる。当時の日本での、即ち絶対主義的な封

建体制の下での個性主義の主張は、当然の事としてロマン主義の形をとって示された。フランスでのロマン主義が、ブリュンチエールのいうように、「文学における個人主義の勝利、自我の完全絶対なる解放」（仏蘭西文学史概要）を意味したのに対して、ドイツと日本におけるロマン主義は、絶対主義の下での資本主義の成熟を背景として生れた「近代的自我」「ブルジョア個人主義」の目醒めを意味していた。従って其処では、ロマン主義による「自我の解放」は、封建的現実の壁にぶつかって超越的逃避的な架空の世界、時間空間的に別種な世界に求められる他なかった筈である。ところが、特におくれで資本主義の仲間の中に顔を出した半後進国の日本では、先述の如く御用資本主義の生産力の急激な発展と外来思想の氾濫とが、ロマン主義的な個人主義の主張を、ロマン的な彼岸の世界から忽ちのうちに、而も、その個人主義の主張の同質的な深化という形で、現実の世界にひき戻したのである。従って、ロマン主義から自然主義への同質的連続性という恐らくは日本にのみ特有の文学現象は、一つにはその両者が結局の処、同じ絶対主義的体制を背景にして生れ育ったものである事、二つには世界史的な視点からして当時の日本の絶対主義的体制が、資本主義の生産力とイデオロギーの超特急的な発展と氾濫を余儀なくされた事の二つに基づいて生れたものと考えられるのである。その同質的連続性という事は、具体的には、自然主義の誕生が、ロマン主義を時代的に否定するという形をとらずに、同一作家における個性主義の深化・発展として乗り超えられた処にもみる事が出来る。独歩・花袋・藤村・泡鳴ら第一期自然主義作家群は、例外なくロマン主義の詩文学から自然主義の散文小説へと個人的成熟をなしたとげた作家で

ある。正宗白鳥はその間の事情を、右に挙げた書の中で次のように語っている。

「泡鳴はおくれ馳せに詩から散文に移ったのであったが、初期自然主義の主な作家は、藤村をはじめ、独歩も花袋も、まづ詩人として世に出たのであった。詩だけでは創作欲を満足させられなくなったのであらうが、詩だけでは生活出来ないことも、小説に転じた主な原因であったのだらう。此等先輩が詩人であったのと異り、その後から出た真山青果や私などは、詩や歌には門外漢の無風流な作家であった。それで、文壇の花形として出現してゐながら、作品に華やかなところも、情趣ゆたかなところもなかった。本の売行も悪くて出版者を失望させた」。一方、田山花袋はその頃の事を「東京の三十年」の中で、モウパッサンの短篇集を丸善を介して取り寄せた日を、明治三十六年の五月十日頃と明記した上で、それに目を通した時の「驚異」を中心にして次のように述べている。

「私にはモウパッサンとドオデの相異などが考へられた。丁度その少し前に、私はピエル・ロチの『氷島の漁夫』を読んでゐた。それとモウパッサンの相異などが痛切に考へられた。事件を叙したものと心理を描いたものとの区別、あるところまでしか入って行くことの出来ない作者と出来る作者との区別、ロマンチックな作者とリアリスチックな作者との区別、さういふことがありありと私の頭に映って見えた。私の心にひそんでゐた、開けずにゐた。しかも動揺し醗酵してゐた心が忽ちそれに触れたのであった。『今までは私は天ばかり見てあこがれてゐた。地のことを知らなかった。全く知らなかった。浅薄なるアイデアリストよ。今よりは己れ、地上の子たらん。獣の如く地を這ふことを屑しとせん。』

#### 批判派と反逆派

徒らに天上の星を望むものたらんよりは——』こんなことを私はその時分の感想録に書いた。西鶴の価値——それも、モウパッサンを読んでから、私にはよく飲み込めて来た。紅葉、露伴、乃至寒月などの唱道した西鶴とは丸で別な西鶴の価値が……」。正宗白鳥に言わせるなら、「獣の如く地を這ふことを屑しとせん」という覚悟の中には、「詩だけでは生活出来る」かどうかの勘定も入っていた、という事になるのであらうが、兎も角も、天から地への、同一作家における個人的「連続的成熟」としての変化が、其処で語られている事が注目されるべきである。

右にふれたロマン主義から自然主義への個人的連続的発展の大前提になつてゐるのは、已に見て来た如く、日本の自然主義が実証主義を第一要因として生れたものではなくて、「個性主義」を優先的因子として生れたという事である。その事を田山花袋は次のように語っている。丁度明治四〇年の自然主義勃興期を真近に迎えかけた頃の事である。「最早その時には、文章とか文体とかいふことではなかった。通とか意気とかいふことでもなかった。それは今日から見れば、さう大したものではないやうに見えるかも知れないけれども、しかもその運動は全く内部的であつた。旧式な日本の習慣や、道徳や、形式や、思想や、趣味や——さういふものに対する破壊を含んだやうな運動であつた。更に言ひかへれば、価値の顛倒であると同時に、徹底的に根本へ入って行かうとする運動であつた。そしてその影響は主として何処から来たかといふのに、言ふまでもなく、それはヨーロッパの世紀末の思潮の反映であつたと言つて差支へなかつた。ニーチェにつづいて、イプセンが入つて来た。ピョートルソンが入つて来た。中でも、ストリンドベルヒの『ユリイ嬢』とその

戯曲論、並びに『父』などは最も強く私達の魂をゆすぶったものであった。『我』といふ思想、個人を一番最初に知らなければならぬといふ思想、つづいて人間を知らなければならぬといふ思想、飽くまで強者であらねばならないといふ思想、弱いといふことは罪悪であるといふ思想、父と子の争闘、夫と妻の争闘、新思想と旧思想の衝突——さうした種類の題目は無限にその前に展開された」。

それに対してヨーロッパの自然主義文学では、自然科学的実証主義によるロマン主義の止揚ということが第一の要因になっている。その事は、自然主義成立が絶対主義崩壊以後、近代国家成立以後の事であることを物語っているといえる。一方ヨーロッパの自然主義文学の他の一つの要因として、個性主義の因子が存在する事も亦見逃す事は出来ない。ヨーロッパの自然主義の場合でも、それを成り立たせているのは、実証主義と個性主義という二つの因子であることに変わる処はない。問題は、先づ第一に上述の如くにそのいずれの因子が優先するかという点にかかっているのである。

② 次に問題になるのは、その二つの因子の優先従属の関係が、いかなる結合関係として成り立っているか、という点である。先づ実証主義を優先因子とするゾライズムでの問題点は、個性主義の因子がいかなる形で実証主義と結付いているかという点にある。元来没个性的であつて、個性主義に貫かれた近世以降の文学的動因と矛盾する自然科学的実証主義が、にも拘らず文学としての自然主義たりえたのは、没个性的な実証主義の個性的な文学的情熱が、其処ではたまたま可能であつたからである。即ち、自然主義がたまたま歴史上劃期的な文学的実験であつ

た事、初めての反文学的試みであつた事が、没个性的なものの個性的情熱という一見矛盾した物同志の結合を可能にさせたのである。而もその背後には、文学的実証主義と政治的（ブルジョア）デモクラシーとの等置、並びに政治的意味でのデモクラシーへの個性的確信・情熱というものがあつて、初めて実証主義的自然主義文学の文学としての可能性が生れたのである。ゾラの次の言葉は端的にその事を示している。「共和国が成立するか、共和国が成立しないかは、ひとつにわれわれの方法を受容するか、拒否するかにかかっている。共和国は自然主義者であろう。さもなければ共和国は存在しないであろう（一八七六年「共和国と文学」）個性主義の因子を優先させる日本の自然主義文学は、絶対主義的な、「偽のボナパルティズム」といわれる「共和国」以前の政治体制のもとにあり、「産業革命」後十年余りという一駒も二駒も遅れた資本主義の発展段階を背景にしている。もともと個性主義なるものは、小商品生産に由来しつつ資本主義の基調をなす「貨幣の物神性」<sup>註1</sup>から発生したものである。それは資本主義の成熟以前、即ち封建時代において芽生えをみせ、資本主義に至って支配的になったイデオロギーである。それに対して「実証主義」は、当然ヨーロッパにおける産業革命以後支配的になって来たイデオロギーである（コントは一七九八—一八五七、ゾラは一八四〇—一九〇二）。そのイデオロギーは、資本主義の成熟に伴う「技術の物神性」ともいうべき新たな法則の上に生れたものといえる。「技術の物神性」とは、「貨幣の物神性」というマルクスの言葉に倣つたものであるが、資本主義の成熟と共に新に附け加わるフェティシズムとして、人間乃至人間と人間の関係が機械体系に還元されるという、最

も現代的でもある法則を仮りに指すものとしておく。その「技術の物神性」が法則化するや、その時以来一切の精神科学・人文科学への自然科学の侵入が始まる。そしてその一例として自然科学の文学への侵入が起り、それが自然主義文学を生むのである。従って個性主義を第一の因子とする日本の自然主義文学は、資本主義初期或いは封建末期の絶対主義体制下における個性主義文学として、先づロマン主義の形をとって現われ、絶対主義—偽ボナパルティズム体制下での御用資本主義の生産力と外来イデオロギーの輸入という先述した条件にたすけられて、ロマン主義からの連続的推移として自然主義化するのである。そしてその際、自然科学の実証主義の因子は、一方の個性主義が絶対主義的圧制のもとでもすると、積極的な自己の解放・樹立という意味を見失って、消極的な自己主張、負符号的な「自己告白」という形をとらざるをえなかった事に対応して、作家にとって第一次の現実を意味する家庭的身辺的現実の「現実破壊」「現実暴露」という極めて狭い範囲での社会性に乏しい現実主義に委縮する事になった。従って実証主義という意味は殆ど薄れてしまい、問題は、文学的個がいかにロマン主義を払拭して、「現実の深み」に入っていくかということになった。現実の広さは見失われ、見失われた広さに代って深さという事が、当時の作家達の願いになった。「近代の小説」で田山花袋は独歩について次のように言う。「何うもまだロマンチックだ。……醜いものとか、悪いものとか、さういふものには成たけ目をくれないやうにしてゐる。そして、何うしても目をくれないやうならぬ場合には、それをいくらかユーモア化してゐる。鍍してゐる。そこが飽きたらない。そこに矢張り、かれの生きてゐる

た時代がある。本当にナチュラリズムの時代になったのは、かれが死んでからだね？」<sup>註2</sup>。

註1 「貨幣の物神性」については、7頁の註、並びに後段参照。

註2 国木田独歩は、数え年38才で明41年に死んでいる。

田山花袋は、数え年60才まで生き昭和5年に死んだ。

共に生年は明治4年辛未の年である。

× × ×

ゾラの自然主義文学が実証主義を介して、政治的なブルジョア主義〔ブルジョア共和国〕の確信に聯っていたのに対して、日本のそれは、似而非近代国家のもとの個性主義の主張を通して、実生活的なブルジョア主義〔個の自由の生活的な実践〕に聯っている。この事は日本の自然主義文学が、表面上「現実暴露の悲哀」とか「皮剥ぎの苦しみ」とか言われるような形を呈している事と矛盾する如くであるが、封建的因習の下での個性主義の先駆的主張が、負符号性を帯びた自己主張という形を執らざるをえなかった事については先述の通りである。自然主義文学の個性主義が、実生活的なブルジョア主義に聯っている事は、それが白樺派以後の文学上のブルジョア主義、文学におけるブルジョア・パイディアの現われとしての個性主義と異っている点から何われる事である。従って文学としての自然主義は、不可抗的な反封建に由来する負符号性のポエジーを機軸として、初めて高い文学性を帯びている事に注目すべきである。絶対主義的因子を濃厚に残した当時の時代的背景のもとで、個性主義を主張する事は、それをそのまま延長すれば確に実生活上のブルジョア主義の主張に聯つてはいたが、事実上の順序からすれば、それ

は不可抗的な反封建の戦いという形を執らざるをえない。其処から、自然主義文学が自らの独自性の同義語のように備えている、反封建に由来する様々の負符号的要素が現出するのである。それは、個の自由のための封建因習との不可抗的な苦闘、挫折、絶望、悲哀であり、後に伊藤整氏によって言われた逃亡、破滅という私小説の二つの型もそれらの負符号性の因子の延長上に位置するものである。しかし、反封建に由来する負符号の因子が、日本の自然主義文学にとって、飽く迄属性に過ぎない事に注目すべきである。その本質は、右の負符号性と表裏一体の関係をもち、実生活上、極めて現世主義的な性格を帯びたブルジョア主義にある。而も、自然主義文学にとっての本質が、実生活的なブルジョア主義であって、文学におけるブルジョア主義（文学の中での個性主義）ではなかった事が、忘れられてはならない。従って日本の自然主義文学は、反封建という副次的性格のゆえに高い文学性を得、一義的積極的性格においては、文学としての存在価値をもたないという、因果な二重性をそもそもその由来からして担ったものといえるのである。<sup>註1</sup> 正宗白鳥は次のように言う。「世の中の事は、金と女で運転するのは古今の定期で、『右りのままに描く』といふ自然主義小説の内容は、おのづから金と女によって構成されてゐるのである。藤村の『家』に関する苦勞の主なるものは金のためであるが、若かりし独歩が妻に逃げられたのも、要するに生活難のためであり、秋声も口や筆で生活難を訴へてゐた。又言う。「或外国文学研究家が、花袋の所謂『皮剥ぎの悩み』について冷笑的批評を下し、何のために自分の皮を剥いだりするのか、フランスのモウパッサンなど自然主義作家は、その作品において、花袋的皮剥ぎなんかやっ

るのだといつてゐるが、それはその通りであらう。しかし、花袋はかかる皮剥ぎを小説の上で行つてゐることに人生味を感じてゐたのだ。菊池寛流の文学観からいつてもこんな事は馬鹿なことにちがひない。それは私は幾度も繰り返して言ふ事だが、日本の自然主義文学は、世界の古今の文学史に例のない文学であつたのだ。例のないといふのは、必ずしも秀れた意味で例のないのではなく、『自縛自縛でじたばたする愚か者』と、傍観者に見られるやうな意味で例がないとも言へるのである。『啓吉物語』の如き、成功者の出世物語の如きは、自然主義者の私小説と全然類を異にしてゐるのである。但し、正宗白鳥は『啓吉物語』の如き、成功者の出世物語』（傍点筆者）が「自然主義者の私小説」とは「全然類を異にしてゐる」と言うのであるが、果してそうであらうか。自然主義文学は確かに「成功者の出世物語」ではない。しかしそれは修飾句を異にした「出世物語」なのである。出世物語の語が不適当だとするなら、世俗主義の物語と云い換えてもいいであらう。実生活上のブルジョア主義は、個の自由の生活的な実現を以て始るが、延長すれば其処には必ずブルジョア主義につき物の実利主義・現世主義・功利主義（金と女はそれ等の象徴である。それに名利への欲望の是認という事も当然含まれる）が顔をのぞかせる筈である。そして其処に生れるのは、商業主義・傾向主義の文学であらう。勿論自然主義文学はその種の「出世物語」ではない。自然主義文学の独自性は、失敗者の出世物語、特殊な由来をもつ負符号付きの出世物語という処にある。自然主義文学の文学性を維持する美的並びに倫理的な深刻味・真実味は、それが「金と女」に成功した物語でなく、「金と女」への深刻で真実味溢れる失敗の物語である



処から生れている。従って、失敗の深刻さ・真実さ〔負符号性のポエジ  
ー、広義には美的並びに倫理的な文学的効果〕が売り物の管の私小説  
に、たまたま成功譚がまぎれこむと、異様な異物感を読者に与える事に  
なる。たとえば「業苦」「崖の下」「秋立つまで」「途上」等々において、  
時には宗教味さえ混えた負符号の深刻さ・真実さを身上とする嘉村磯多  
〔明30年丁酉生——昭8年36才死〕の「神前結婚」の次のような個処が、そ  
の好例である。「私は居間の炬燵に這入って蒲団を引き掛け寝ころんだ。  
もう二月号創作の顔触れも新聞の消息欄に出たのだから、定めしめん  
な大いに活躍してゐるだらう、自分などいっそのこと世を捨て、耕作に  
従事しようかしらと、味気ない、頼りない心でぽかんと開いた空洞の  
眼をして、室の隅に積み重ねてある自分達の荷物の、古行李、バスケッ  
ト、萌黄色の褪せた五布風呂敷の包みやを見てゐた。『父チャン、ハガ  
キ……』仰向けのまま腕を延べ、廻送の附箋を貼ったハガキを子供から受  
取り裏を返すとき、やっ！ と叫んで私は蒲団を蹴飛ばして躍ね起きた。  
……私は、『これを見い』とハガキをユキの眼先に突き附けた。——御作  
『松声』二月号の××雑誌に掲載する事にしました、御安心下さい——  
といふ文面と、差出人の雑誌社の社長のゴム印とを今一度たしかめた利  
那、忽然、私は自分の外に全世界に何物もまた何人も存在せぬものや  
うな気がした。私は『日本一になった！』とか何とか、そのハガキを持  
ったままぐらぐらと逆上して板の間の上に舞ひ倒れてしまった。後々  
は、野となれ山となれ、松舞台を一度踏んだだけで、今ここで死んでも  
更に思ひ残すところは無いと思つた。暫時の間、人事不省に陥ちたが、  
気がついて見ると、ユキも私の傍に崩れ倒れて、『ああ、うれしいうれ

しい』と、細い長い長い咽び入った声で泣き続けてゐた。これは自然  
主義文学・私小説にとつて「成功譚」というものが如何に不均合である  
かの見本のようなものである。しかしこの不均合の滑稽の陰には、私小  
説の正体が顔を出しているのである。即ちこの嘉村磯多の文章は、私小  
説が結局の処裏返えしにされた、負符号付きの出世物語に他ならない事  
を、語るに落ちるといふ形で暴露しているといえるのである。他の多く  
の自然主義文学では、その世俗的な出世物語的性格が、反封建に由来す  
る負符号的屬性の陰にかくれて、幸にもあらわでないというだけの事だ  
がある。なお嘉村磯多の場合では右の成功譚的出世物語は彼の全体とし  
ての挫折物語の偶然の挿話に留まっているが、実生活的ブルジョア主義に  
よる出世物語的因子の点で、殆ど例外的といえる程に注目し得るのが、  
島崎藤村であろう。

日本の自然主義文学は反封建に由来する負符号性の要素と実生活的ブル  
ジョア主義に聯る個性主義の要素との二重性から成り、而も後者をそ  
の本質としている。その事は、彼等の文学が絶対主義並びに似而非近代  
国家の封建的側面に対しては、確かに幾分かの反逆性を發揮しており、  
しかし彼等の文学の本質をなすブルジョアの世俗主義という面では、彼  
等が一樣に、似而非近代国家的政体を上部構造とする当時の全体的現実  
〔絶対主義的侵略主義的な御用ブルジョア社会〕に対しては、結局の処肯  
定の乃至無問題の事であつた事にも示されている。石川啄木はその事に就  
いて次のように発言している。「最近一部の日本人によって起されたこ  
ころの自然主義の運動なるものは、旧道徳、旧思想、旧習慣のすべてに  
対して反抗を試みたと同じ理由に於て、此国家といふ既定の権力に対し

ても、其懐疑の鋒先を向けねばならぬ性質のものであった。然し我々は、何を其人達から聞き得たであらう。其処にも亦、呪ふべき性急な心が頭を擡げて、深く、強く、痛切なるべき考察を回避し、早く己に、恰も夫に忠実な妻、妻に忠実な夫を笑ひ、神經の過敏でないところの人を笑ふと同じ態度を以て、国家というものに就いて真面目に考えている人を笑ふやうな傾向が、或る種類の青年の間に風を成してゐるやうな事はないか。少くとも、さういふ實際の社会生活上の問題を云々しない事を以て、忠実な文芸家、澆刺たる近代人の面目であるやうに見せてゐる、或ひは見てゐる人はゐないか。實際上の問題を輕蔑する事を近代の虚無的傾向であるといふやうに速了してゐる人はないか。ある——少くとも、我々をしてさういふ風に疑はしめるやうな傾向が、現代のある一隅に確にあると私は思ふ」〔「性急な思想」〕。

更には、自然主義文学の本質が実生活的なブルジョア主義に於つた事は、修飾句をなす「失敗者の」という負符号性の因子が、忽ちのうちに反封建という本来の由来を忘れ去つて、無目的なまま単なる文学性維持の手段に墮してしまつた事からも見る事が出来る。片山孤村は「自然主義脱却論」(「明治43年4月帝国文学」)の中で次のように言う。「我が文壇の自然派は確に今日の勝利者であるが、今日も早や暮れかかった。さうして明日の運命は測り難い。彼等は新、新と振れあるいてゐるが、實際新しいものをさう沢山持つてゐないではないか。生活難、耽溺の経験、春機発動の閨歴、家庭の紛糾、<sup>イデオロギ</sup>神經衰弱——其外に何がある。身代限りももう目の前である。斯くの如きは実に新を迫つて走るもの免るべからざる運命である」。反封建という目的を見失つて、無目的な手段と化し

た負符号性のポエジーは、彼等の文学を忽ちのうちに只の醜惡な暴露記事に墮さしめてしまふのみだったのである。

このようにして彼等の文学から負符号性のポエジーの眞の由来が見失われる事によって、文学的ポエジーの病的枯渴を招き、更に同時に無問題かつ非文学的なブルジョア主義が露呈するに至るや、彼等の文学に残された只一つの問題は、「技術」乃至「技巧」の問題だけだという事にならざるをえない。文学の世界で技術の問題が表面化するのは、多くはその文学が批判的機能を喪失して、ポエジーの枯渴が露呈した時の事である。技術の問題は、その時、上の二つのものの補填役として現われるのである。無問題的な世俗主義の文学は、結局の処「生活綴方」の技術的延長線の上に位置するものといえる。其処で最後のきめ手となるのは、描写における無技巧の技巧という名人芸である。徳田秋声の「自然主義の莊嚴」とは、恐らくはそのような名人芸的な技巧の練磨の果てに生れたものである。正宗白鳥は、以上の点にふれて次のように言う。「自然主義には最初から反逆性が含まれてゐたか。その作家と作品は、日本伝統の文学とは異り、社会に対し国家に対し、多少の反逆性を発揮したのであつたか。それを検討するのも興味ある事である。数十年前、私は逍遙邸に伺候した時に、『先生、文学は要するに技術だけのものではないでしょうか』と訊ねると、『そうさ、二葉亭も先日来た時にさう言つてゐた』と答へられた。二葉亭は、ラスコルニコフのやうに、よく『考へる事』をしてゐたものだ。次ぎから次ぎへと、皆んながかりで、ああも考へかうも考へしても、詰るところは、『人生何如』を突き留めることは出来ないで、技巧だけで終つたのではあるまいか』。結局

の処では彼等の文学が、「反封建に由来する負符号性を備えた」「失敗者」の「出世物語」〔実生活的ブルジョア主義〕であるという二重性を備えていた事に、「技巧」の問題はかかわっていたとも言える。即ち彼等の技巧とは、自らの文学の負符号的反俗性とブルジョア主義的世俗性との間に均衡を与えるための技巧であったと言える。世俗性を本質としながら、反俗的負符号性によって文学性を高められるという二義性が、技巧の問題の発現地なのである。後に完全に「負符号的ポエジー」なるものが人工的な売物になるに至って、「演技説」が説かれるようになったが、そのそもその由来は、私小説に備わった原理的な二義性にあると考えられる。即ち、「失敗者の出世物語」たる私小説の二重性である。やがて、「成功した『失敗者の出世物語』」というケースが生れるに至って、右の演技説は云々されるのであるが、その「成功した失敗（出世）物語」の第二次的ケースは、右の原則的な二重性を拡大してみせたにすぎないのである。倫落、不健康、不幸を敢えて自ら求めなければ、自らの文学に成功せず、成功する事が愈々作家に人工的な負符号性を余儀なくさせるという私小説にとっての皮肉な悪循環は、もともと自然主義文学が誕生以来担なわされていた運命だったのである。従って、私小説は反封建という先駆的負符号性の契機を失えば、直ちに世俗化して大衆文学に墮するという可能性を原則的に孕んでいるのである。その事は、自然主義文学誕生後間もなく、萌芽的に現実の事となったが、以後長く封建的因習と共に寿命を保った私小説を、戦後の、上からの、しかしほぼ完全な意味合いのもとに実現されたブルジョア社会に据えてみる事で、より判然とするであろう。詳しくは後述にゆずるが、御用資本主

義のもとでブルジョア社会が安定に向かう昭和24年以後、私小説はいや応なしに中間小説、風俗小説へと変容をはじめ、昭和30年から31年にかけて、資本主義の高度成長期が始まると共に、私小説終焉論、文壇崩壊論が盛んに論議された、という事実が何よりも右の事柄を判然と示しているのである。

〔続く〕

註1 川副国基氏は「日本自然主義」〔岩波講注、文学4、国民の文学（近代篇）（1）所載〕で、次のように述べている。「フランスのような進んだ国では已に自我の解放があり、解放された自我の絶望の上にフロアベルもモーパッサンも新しい小説技法―虚構の世界を發明したのであったが、おくれたわが国では、まだ自我の確立が問題であった。個人の確立のないわが国では先づ自己をみつめる、自己を掘り下げることからはじめなければならなかった。自我の確立という、この国の浪漫主義があまりに慌しく経過して、なすとげるところ少かった仕事を、この国では、自然主義が承けつがねばならなかった。……そしてまた、中村光夫がその『風俗小説論』（二十五年）のなかで、完膚なきまでに批判し尽したように、花袋が『寂しき人々』に同感したというのは、作者ハウプトマンに同感したのではなくて、作中の主人公フォケラットに同感したことであった。そのことから、『蒲団』も、作者自らが作中人物として躍るといふ拙劣さにおちいっていた。以上同氏のいう処、また中村光夫氏を引用して言及する処の由来は、自然主義文学が、実生活的なブルジョア主義を本質とし、文学的ブルジョア主義を以て成るものではないという処にあるのである。